

たていしはちまんぐうごじゅうせきとう  
**立石八幡宮五重石塔**

鳥栖市重要文化財（石造建造物）

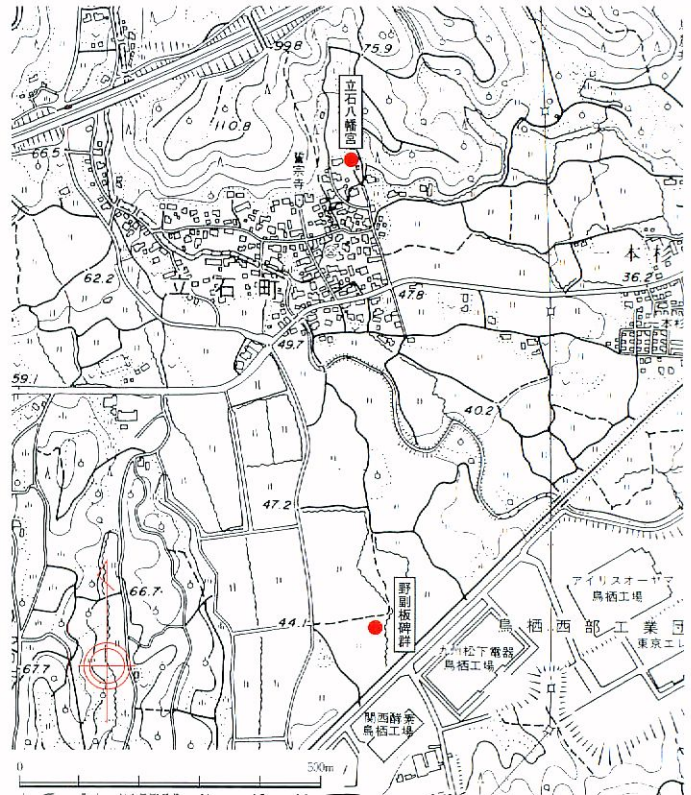
鳥栖市教育委員会



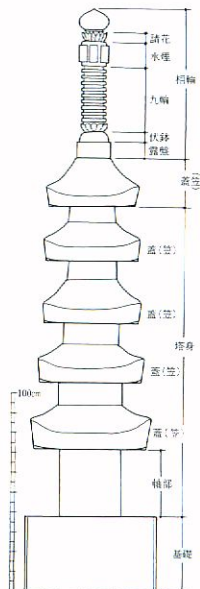
所在地	鳥栖市立石町北小路1940番地（立石八幡宮境内）
管理者	立石町
指定年月日	平成5年10月8日



立石八幡宮



祠に納められている相輪



重層塔部位名称

(松隈尚「鳥栖・三養基の中世石塔」)  
 (『栖』第22号より引用)

室町時代前期頃（14世紀後半）に造立されたものと推定される供養塔です。花崗岩で造られた繁層式の多層塔で、相輪部分を除いた高さは約2.2mあります。現状は五重ですが、三層目から四層目の蓋（屋根）幅に差があることから、もともとは七重であった可能性も考えられます。近年に新しく作った宝珠を載せていますが、もとの相輪については上部が折損するものの別に残されています。中ほどがふくらんだ軸部（基礎石の上）の四辺には、梵字で「金剛界四方種子」が刻まれています。市内ではこの時期の石塔で完形に近いものは他にみられない貴重な資料ですが、当初からこの場所にあったのかあるいはいつの頃かに移されてきたのかは不明です。

### ■多層塔

中国の樓閣建築と仏舎利信仰が結合してできたもので、三重から十三重まで奇数の重層によって形成されています。基本的な構成は、最下段に盤状の基礎を据え、それに塔身を載せます。塔身は蓋石と軸石とを積み重ねており、最上層の蓋石の上に相輪を立てています。相輪の一番下の伏鉢、露盤が仏舎利塔を象徴するものでもっとも大切な部分です。

軸石と蓋石を別の石で作し、交互に積み上げた「間層式」と、蓋石と軸を同じ石で作しそれを積み上げた「繁層式」があり、立石八幡宮の五重石塔は後者にあたります。